かずさの博物誌

ハヤブサ

～孤独で凛とした猛きん類～

文・写真／成田篤彦

2014.9.20

今春の午後、水を張ったハス田で、コチドリが二羽、えさをついばんでいた。だが、急に、飛び去った。

市街地の上空から、カラス大の鳥が、つばさを水平に保ちながら、一直線にハス田に向かってきて、旋回し去って行った。タカ類だと思ったが、種名は分からなかった。

この湿地にはタカ類の獲物となるバン、セイタカシギ、カルガモ、アオアシシギ、スズメ、ヒバリなどたくさんの野鳥が冬を越していた。

約一時間後、再び、カラス大の野鳥が頭上近くに現れた。

大きな眼、ほほの黒い斑紋。ハヤブサだ。黄色の太い脚には何かをつかんでいるように見えた。しかし、カメラの液晶画面を拡大して見ると何もつかんでいない。私を警戒したのか市街地へ去って行った。

六年前の秋、小櫃川河口の防波ブロックに腰を下ろして休息していた。広々とした干潟には鳥陰が全くない。普段はハマシギやシロチドリなどが群れているのに、異常なくらい静かだった。

干潟の中ほどに大雨で流れ着いたコナラの倒木が横たわっていた。双眼鏡で覗くと一羽のハヤブサが背を向けて止まっていた。飛行中のハヤブサには出会うが、止まっている姿を見たのは初めてだ。干潟にシギやチドリが一羽もいなかったのはハヤブサに襲われるからだと思った。

彼は干潟全体を見渡しているように見えた。広い干潟にたった一羽のハヤブサがいるだけだ。孤独だが、凛とした姿だ。

▲干潟の流木に止まるハヤブサ＝2008年10月9日　木更津市

▲市街地を旋回するハヤブサ＝2014年4月17日　木更津市

姿勢を低くし、近づいた。ハヤブサは大きな眼でぎょろりと私を見た。その眼は近づく私に困惑しているように見えた。その後、陸の方へゆっくりと飛び去った。

また、かつて、小櫃川の下流域にはスズガモ、ヨシガモ、オナガガモなど約二千羽が越冬していた。ハヤブサが送電線の鉄塔から急降下して彼らを襲う勇壮な狩りを見た。しかし、今はカモの越冬が見られず、ハヤブサの狩りも見られなくなった。

だが、毎年、上総には秋～春に多くのシギやカモなどの渡り鳥が越冬しに来る。それを狙って数は少ないがハヤブサもやってくる。それだけ上総の冬の自然は豊かな証拠だと思う。運がよければ再び、上総でスピード感あふれるハヤブサの狩りが、また、見られるのでは？と期待している。

▲湿地上空を飛ぶハヤブサ
＝2014年4月17日　木更津市

▲飛び立とうとするハヤブサ
＝2008年10月9日　木更津市

memo

ハヤブサ

ハヤブサ目ハヤブサ科

全長雄四十二センチ、雌四十九センチ。ほぼハシブトガラス大。主に海岸の断崖に巣を作るが近年は建築物にも作る。海岸の水鳥の多い場所にいる。本州中部以北で繁殖するが、多くは冬鳥として渡来する。小型から中型の鳥類を空中で捕獲する。国の絶滅危惧Ⅱ類、千葉県指定重要保護生物。

近年、分子遺伝学研究により、ハヤブサ目はタカ目の鳥と外見は似ているが、系統的にはインコ目やスズメ目に近いとされる（樋口広芳２０１３「日本のタカ学」東京大学出版局）。

参考文献

千葉県レッドデータブック
動物編２０１１年。

◎写真・文章の無断転載を禁じます。